

気仙沼湾の入り口付近に位置する株式会社高橋工業は、数々の斬新な建築作品を手がけている。同社はもともと造船を主体とした事業を営んでいたが、漁業の不振により断念。しかしその技術に誇りを持ち、現場を海から陸に移して建築の分野でそれを生かすという新たな挑戦を続けている。

東
VALUE
宮

北
SIGHT
城



株式会社高橋工業 代表取締役

高橋 和志 (たかはし・かずし)

1957年1月宮城県気仙沼市生まれ。1982年3月長崎造船大学大学院修士課程修了(船舶流体力学専攻)。同年4月、家業の(株)高橋造船鉄工所入社。1985年3月同事業所廃止により退社。同年6月株式会社高橋工業を設立、代表取締役役に就任し、現在に至る。
株式会社高橋工業
〒988-0247 宮城県気仙沼市波路上内沼38番地4
<http://www.takahashikogyo.com/>
TEL 0226-27-3943・FAX 0226-27-4613

海から陸へ

私の家系は代々続く船大工の棟りょうで、時代の変遷とともに木船、鉄船から鋼船建造を通じて東北・北海道地方の漁船漁業の隆盛の一翼を担ってきた。しかし、1975年の200海里規制による漁業海域の縮小、これと前後したオイルショックによる燃油高騰の影響を受け、漁船漁業を取り巻く経済環境が一段と厳しさを増し、取引船主の相次ぐ倒産により、85年に家業の高橋造船もやむなく廃業に至った。

幼少の頃から、祖父や父から学んだ造船が私の代で途絶えることへの無念さと、次世代への継承をすべく「経済は負けたが、腕で負けたわけではない」との思いから一念発起し、85年に実弟と2人で協力し船舶機装・修理および鋼構造物工事を目的とした高橋工業を設立した。

その後、国際的な資源管理規制の強化により漁獲量の激減で気仙沼港における漁船漁業も活気を失い、船の仕事も減少した。そのため、造船で培ってきた機関配管機装の知識と技術を生かし、陸上プラント工事などを手掛けるようになった。

造船から建築へ

未知の分野であった建築への転進は、1994年にオープンした気仙沼市の「リアスアーク美術館」の建設に携わったことが契機となった。

独創的で斬新なデザインで設計された美術館は、建物全体が自由曲面で構成された非常にユニークな外観を呈していて、外壁面にはアルミ合金や鋼板などの金属材料が使用されていた。そのひとつのエントランスホール壁面は、分厚い鋼板が大きく湾曲し

陸に上がった 独創的な建

た独特のデザインで、建築ではコスト的にも技術的にも難しいとされていたが、これを造船では一般的な「鏡鉄技術」を応用して造り上げた。この技術は、鉄の収縮特性を利用し、火災と水により連続した塑性変形を鋼板に生じさせ、任意の複雑な三次曲面を加工する造船独自の技法である。この美術館が、日本建築学会賞を受賞し高い評価を得たことが建築分野への進出の大きな足がかりとなった。

2000年には、仙台市の複合文化施設「せんだいメディアテーク」の建設に参加した。この建築も日本建築学会賞を受賞したことにより、気仙沼の造船技術が広く知られるようになった。

建築から作品へ

2004年夏に、若手建築デザイナーからフランスのブティック「ランバン」銀座店の相談を受けた。日本での旗艦店にふさわしい斬新なファサード(建築物の正面の顔)を計画中で「数千の光が輝く窓枠のないファサード」を設計コンセプトにしたい、しかし大手メーカー数社から無理だと断られたので建築技術で無理なら造船技術でできないかとのことだった。

窓枠がないということは、壁と窓が一体化しファサード壁面に一切の凹凸がないことを意味する。この難題の解決策として、壁に窓をはめ込むことが最適と判断し、造船で用いられる嵌め合い(fits)の技術を提案した。嵌め合いは、物質の温度変化による膨張特性を利用し締結することにより成立する。ここでは、異物質であるアクリルと鋼の熱膨張率の差

造船技術で 築に挑む

異に着目して「冷やし嵌め」方式を採用した。具体的には、ファサード壁面を自立させる鋼板ハニカム構造、輝くために光を透過させるアクリル素材を窓に、リングを壁に埋め込み窓枠をなくす方法などを考案し、デザイン性・構造強度および水密性などの必要条件を満たした。

ランバン銀座店は、これまでの建築概念にはない、造船技術を応用したファサードとして銀座の夜に輝くことになった。この斬新なスタイルは、グッドデザイン賞、ディスプレイ賞などの多くの賞を受賞した。これが転機となり、意匠性が高い建築作品への活路を見いだした。

造船技術と建築の融合

建築は、柱・梁が応力を負担する軸組構造が一般的で、その構造部材は外装などで隠され、露出した姿で目に触れることが少ない。しかし船では、流線型の船体を構成している船殻が応力を負担する「モノコック構造」で、船殻面がそのままシルエットとして映し出される。

建築は、地面に固定されて動かないので二次元、船は海上を航海し自由運動をするので三次元の座標で位置が表現される。物事を対比してとらえることで温故知新の造船技術を、異業種の建築分野に融合し、新規性・独自性に満ちた作品を創出してきた。建築技術上の問題点は、造船技術にとってのすき間産業になり得る。幼少の頃、祖父から聞いた「船大工は家も造るが、家大工は船を造れない」の言葉を

思い出し、造船からの発想を原点とした「ものづくり」に気づいた。

仕事の流儀

造船の手技を得手とする仕事は、個人の技量もさることながら、求められるのは情熱と忍耐である。日々に、なすべき仕事にひたすら打ち込み腕を磨き、自分自身のキャリアの方向性と目標を持つことができれば仕事が楽しく、好きだと思えるようになる。会社とは個人の自己啓発、そして能力開発の場でもあり、キャリア実現の場である。

自分達の技術が生かせる仕事を請け負うこと、それが高橋の仕事の流儀である。

今朝、銀座からほど近い築地魚市場に足を運んで、ふと思い出した。かつて建造したマグロ船の初入港時、岸壁でもやい綱を受け取って迎え、船頭からマグロを一本もらったことがあった。だが、今はその船はいない。陸に上がり、海を渡って大陸の仕事をするとは思わなかったが、新しい転機がそこまで来ていることを築地の潮風が教えてくれた。



ランバン銀座店